

本間先生講話

考える学習のために

本間直樹・高橋綾

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

2010年8月30日 香櫨園小学校研究全体会

本日の予定

1. 1学期の振り返り
2. グループワーク1 ローベルの絵本
3. グループワーク2 相互質問法
4. 質疑応答+まとめ

1学期の授業を振り返って

先生方の質問から

1学期のふりかえり、3年生の授業が素晴らしい授業をされたと思います。あとの皆さんの感想や質問について少しお答えしたいなと思います。皆さんが1学期に話したり考えたりされたことを少し振り返ってみたいと思います。

3年生というか学校の香櫨園浜の取り組みというのは外部の私からすれば、ある意味うらやましくて、非常に先見的でぜひこれを続けていって頂きたい。こういう形の環境教育と地域の団体と先生達と子ども達が連携してやっているというこの学校の特色として強調されるべきかと思います。特に、地域の方々、チーム里浜の方々の熱心さ、熱心さが、私が思っていた以上に、自分達が伝えたいということがどのようにすれば先生や子ども達に伝わるのかについての努力を本当におしまない人たちで、子ども達の声を一番受け取られたのは何よりもチーム里浜の方達だと思います。後ほど、チーム里浜づくりの方々の感想を読ませて頂いたのですが、本当に素晴らしいものばかりです。

いいことを教えてもらった

何かを受け取ることを通して自分は伝えた

これが前回お話したかったことの一点ですが、何かを人に伝えようと思うことよりも、自分がすごくいいことを教えてもらったと思えている時が一番何かを伝えることができた時、これが何か伝えることの不思議さなのですけれども、本当にそれに該当することをチーム里浜の方達がおしゃっていた。子ども達からいろんなことを学んだと書かれているのですね。このことは私が言いたかった伝え合いの基本だと思うのですね。彼らは、自分の言いたいことを単に子ども達に反復させるのではなくて、子ども達から何かを受け取るということを通して自分は何かを伝えたのだという実感を初めてもたれた。このことを準備された先生方、この学校が素晴らしいと思うのですけれども、ほかの環境教育以外でも広げていければ本当に素晴らしいことになると思います。

その時の研究全体会で頂いた質問6つありました。その代表的なものについて、私が一方的に話すのではなくて、みなさんから頂いた感想、質問から答えたいと思います。

Q1 どうして「ハマ」のつく植物を
答えさせるのはよくないの？

A. 生徒は、「ハマがつく植物は浜に生えている」という一般法則（仮説）を発見した。

他に「ハマ」のつく植物の名前は？という先生の問いは、この生徒の発見や仮説に答えておらず、先生が知っている答えを生徒に答えさせるコミュニケーションになっている。

まず、第一点。見せて頂いた授業の中に出てきて、授業の振り返りの中で出てきた。ある生徒さんが、「浜のつく植物は、ハマヒルガオ。浜にはえている植物だからハマという言葉がつくの。」ということを挙手して言われて、その後の先生の応答はもっと別でもあっていいのではないのでしょうか。私が言った時のそれは何でしょうか。十分私が説明できていなかったの、これは私の見解ですけれども。

生徒がまずその時にどんな発言をしたのかというのが非常に重要なことですが、ハマ何々というのは何かこう一般性ですよ。生徒が教えられた知識ではなくて、自分から知識を獲得していく時のひとつの子どもが必ず見せる態度だと思うのですけれども一般化ということをするのですね。ハマなになにと言うのは、浜に生えているという特徴を持つからこういう命名をするというルールというか、一般仮説ちょっと難しい言葉ですが、科学でいう仮説をたてるわけですよ。ところが、実際授業の場所では、先生は別にその先生のいきかたがおかしいとか間違っているとかというわけではないのですけれども、先生のやったことは何かというと、「ほかにハマのつく植物は何でしょう。」と聞かれたのですね。これは別にまったく間違っているものではないのですけれども、これはどういう種類の発言であったのかということをお伝

驚き

えしたいと思います。

これは、実は子どもは、自分はこういう仮説を発見したという発見です。彼女が発見したのはこういう一般法則を自分は見つけたのだという驚きだったのです。ところが、驚きの部分に反応されずに発見とか仮説を見つけたとかいう驚きではなくて、「じゃあ他にどんな名前の植物がありますか。」というふうに先生が知っている答えを子どもに聞いてしまった。先生が正しい答え、正解を持っている答えをみんなに言わせるということをしてしまった。授業の場面では、他の正確に植物の名前を覚えるとか別の目的があるのならば、別に全然これで問題はないのですけれど、前回の授業などは、先生が知っている答えを生徒にあてさせるのではなくて、子どもが何を発見したのか、子どもが発見したことに対して、他の子どもがどんな感想を持つということがより重要である。そう意味で他の応答の仕方があったのではないかと思います。

他の応答の仕方

例えば、私であれば、「何々さんの発見したことについて他の人はどういう風に思いましたか？」何の変哲もない返しですけど、ほとんど何も言わないに等しいですけど、「ああ、そうですか？ほかの人はどう思いますか？」という返し、ひとつ返します。

適切な応え方の例

「〇〇さんの発見したことについて、他の人はどう思うかな？」

⇒対話としての〈問い〉とは、
自分の知らないことを相手に尋ねること。
相手の発見に驚くこと。

5

本来の問いの役目

問いとか問いかけというのはいろんな伝え方があると思うのですが、私が大事にしたいと思うのは、自分が知っている他にもハマのつくのはこの名前この名前があるというのを自分が知っている度合いで、答えさせたいといのは問うのではなくて、もっとほかの人は私の知らないことを知っているかもしれない。私の知らないことを教えてよということが、やっぱり本来の問いの役目だと。

学問というか勉強の問いも本当はそうだ。数学の方程式、方程式は習わないか。算数の問題であっても、自分の知らないことにチャレンジしようと思うから、知的好奇心をかきたてる。だれかほかの人が知っていることを自分が当て推量するだけではそんなにおもしろくはないですね。

Q2 環境教育としての狙いが
必要なのではないか？

A. 環境について考えるために最も重要なことは、
環境についての知識を伝達することではなく、環境
に関することを自分の問題としてどのように引き受
け、その問題について協働して考えること。

未来

同じくらいの答
えが二つ並ぶ

今回の授業をみてもその環境教育のねらいがよくわからなかったとおっしゃって
ましてけど、これは私の意見ですけれども特に環境と言っても地域と環境と言うのが
テーマだと思います。地域と環境に対してはこれが唯一の正解、正解はあるとは思
いますが、唯一の正解というものはないじゃないか特に**環境**というのは、**歴史**とか、**共同体**
とか、**未来**ですね。未来この浜は10年後どうなっているかだれも正解を持た
ない。だから、環境についての今はこうですという図式よりも、まず浜について香
榎園浜についてそれは自分の問題だと先生方も子ども達もチーム里浜づくりの方々も
自分の問題として引き受けることができ一緒に考えることができた。地球というグ
ローバルの視点でも、日本という視点でも地域という視点でもどれでも同じだと思
います。環境教育の本当の大事なことは、**答えがオープン、オープンで同じくらいの答
えが二つ並んだしまった時に、さあ私達どうしましょうか？**といことを私達考えてい
かないといけないのですね。そういうことの時に、大人も子どもも環境という問題では、
自分達は何も知らないのだ。

例えば、今回チーム里浜づくりの人たちが、どうしてこの浜に魚が打ち上げられて
いるのかという問題について、子ども達に聞かれて自分達は答えられないというこ
とに気づかれたのですね。それは、とても大事なことですね。まだまだ、自分達はこ
の浜のことについてはまだまだ知らないということがいっぱいあるのだ。専門家に聞
いたら、それなりに答えが返ってくるけれども、専門家おそらく仮説としてこうじゃ
ないのでしょうかねとするけれども、やっぱりそれはよく考えてみないとわからない。

地域や環境に関する問題については、
正解がないのが当たり前。

⇒大人も子どもも、「自分たちは何を知らないか」
を知ることが大切。
正解のない問題について、あきらめずにみんなで
考える習慣をつくるのが教育の役割。

あきらめずに

貢献

まだまだわからないことがたくさんあるのですね。だから、持続的に考えていくということが、あきらめずにみんなで持続的に考えていく習慣づくりということが、特に環境教育のねらいであると思います。今すぐに答えが求められるのではなくて、10年後、20年後子ども達が大人になった時に、親になった時にどうしたらいいのかということについて教育がどんな貢献できるのかという点が環境教育のねらいだと。

Q3 環境、美術、絵本の授業が、
バラバラの営みに見える。

A. 知識学習と考える学習ことを区別しましょう。

知識学習：教えるべき答え（=先生が知っている
こと）を学ぶ

⇒でも、もし先生が間違っていたら？

以前総合学習をするためにどんな工夫が考えられるかというので、こんなふうに提案をさせて頂いた。問いかける。感じる。コミュニケーション。協働する。3年生については環境学習、4年生について例えば、働くについて考えるという機会を、5年生は美術を、6年生は、異文化を学ぶということで英語教育もかねて、こういう全体の学年をつらぬいたことが考えられるのではないかと思います。いろんなことに私は色々関わらせてもらいたい。それでも、環境、美術、絵本とてんでばらばらなことをやっているだけじゃないかかと思ってしまう。でもそれはおっしゃる通りだと思います。

おっしゃる通りだと思いますので、もう一度私の考えをお伝えしますと。これは仮の言葉ですし、これはどちらが大事だというわけではないし、とりあえずこれを区別してみませんかという提案です。

ひとつはあの知識学習です。もちろんこれはあらゆる学習にとって重要な欠かすことのできないものなのですけれど、今、知識を学ぶということをしているのかということと、あと考えるということ学ぶということをしているのか。自分は今どちらに重点をおいているのかということをも含めて教師側が、アクセントとしてどちらを強調するのかということとを区別してみてもいいと思います。このアクセントの付け方は難しいですけれど。仮に私が知識の学習ということは、先生私が知っていることを皆さんに教えるということ。これは確実なのですけれど、私が出来ていることを確実に自分の後継者、自分の学習者に叩き込んでいく、これは確実な学習の方法です。もし自分が間違っていたらどうするのか。学習というのは難しいのですけれど、私の言うことを全部信頼しなさい。親であろうと先生であろうと大人が子どもに。私が正しいのだから、私の言うことを学びなさい。これもひとつの伝統的な教え方だと思う

のです。ただ、その限界があることを私達は知る必要があつて、自分が間違っていたらどうするのだろうか。世の中の結構多くのことが、确实のそうだといえるのか。

例えば、温暖化問題といわれますけれど、実はCO₂の量が増えたから暑くなるのかというのはわからない。わからないのですね。あたかもそれが絶対正しいというふうに教えている人もいる。わからないのですよ。科学的にまだまだ議論しないとイケない。わからないのですけれど、でも政策レベルではどちらかに決めないとイケない。だから、科学的に正しいというのと、政策的に正しいということといるんなふうに考えないとイケない。要するに大人の言うことをうのみにさせておくという学習の作り方というのはちょっと一面的ではないか。特に現代社会、ややこしい世の中ですね。だから、考える学習というのが最近重要になってきているのですけれど。大人を疑えとか、大人が言うことは全部うそだとか。そんなことを言っているのではなくて、大人を含めてどうすれば答えを得ることができるのかを学ぶ。これはデューイが言っていることですが、**think how to think** どういうふうに考えれば、考えることができるのか。think how to think ですね。

think how to think

考える学習：

どうすれば答えを得ることができるかを学ぶ

- じぶんが何を知りたいか、知るべきか
(知的な好奇心、驚き)
- じぶんが分からないことを誰にどのように尋ねるか
(対話、コミュニケーション)
- 与えられた答えを受け入れるか／否か
(批判的思考)
- なぜ答えを受け入れるか／受け入れないか
(論理)

これがさきほどのちらっとお見せしたカリキュラムと同じことなのですけれども、知的な好奇心、対話、批判的思考、論理的思考、こういう枠組みが考えられるのです。もう少し簡単に言うと、これは子ども達にとってもそうなのですけれども、**自分が何を知りたいか、知るべきなのかこれは知的な好奇心、自分が分からないことを誰にどんなふうに尋ねたらいいのか。**これは当然、地域、香櫨園浜の時も実際されたと思うのですけれども、自分は知らないこれは誰に聞いたらいいのだろう。誰に聞いたら自分は答えに近づくことができるのだろう。何を調べたいのか。本をよんだらいいのか。本が書いたあることはすべて正しいのだろうか。

知的な好奇心
対話

批判的思考

三番目は、今ちょっと言いかけましたけれど、**大人が教えてくれたこと、本に書いてあることは本当に正しいの。**これは、**批判的思考。**ここで終わったらだめです。単に、大人を疑え、本を疑え、ではなくて、自分はその答えを受け入れるかどうかとい

論理

うことを自分で決めるということです。自分はこの答えは意見がいろいろあるけれども、私はこの答えを受け入れる、あるいは、受け入れない。これが論理と言うことは、どうしてもなにか小難しい自分とは関係ない抽象的なことから、なんのことやらと思われるかもしれませんが、本当の論理というのは、相手の言うこととか、示されたことは納得いく、だから、それを私は受け入れる、受け入れないことを決定することが**本当の論理だ**と思うのですけれど。だから、論理と言うのは考えることの基本と言われるのですけれど。

だからこの4つですね。自分が何を知りたいのか。自分は分からないことを誰にどのように尋ねるのか。コミュニケーション。与えられた答えを、それを自分は受け入れるべきか。否かということをもまずは吟味してみる批判的思考と、私はなぜそれを受け入れたのか、あるいは、なぜ私はそれをしませんでした、ただし、しませんでしたと伝えるのではなくてこういう理由だからと、理由をちゃんとと言えるということですね。この4点が考える学習の入り口になると思います。これは知識の学習とたぶん両方やった方がいいと思います。

⇒「総合学習」で重要なのは、考える学習。

環境、美術、絵本を素材として利用する場合も、

- 問いかける（知的関心・批判的思考）
 - 感じる（感性、共感）
 - コミュニケーション（聴く、話す）
 - 協働する（ケア、仲間、共同性、地域への関わり）
- がどのようになされるか大切。

10

これだけでもだめだと思いますので、だから、環境、美術、絵本といろいろなものを使っています。基本は考えるという学習が大事であって、総合的な学習の時間ですから、今の4つの点について、さらにさきほどちらっとお見せしました表についても少し話させていただければ、これは違うバージョンでもう少し広く書いてあるのですが、あの問いかけるということですね。感じるということですね。聞く、話す、コミュニケーション、協働するということが環境という問題を考えるにしても、美術、美術鑑賞するにしても、絵本と言う物語を題材にしても、基本は何をアつかっていてもやることは同じだと思います。

絵を見る場合は、相手は言葉ではないので、好きかどうか、好きになれないのならなぜ好きになれないのか、好きだったらどのへんが好きだと思うのか、感じるのがやっぱり大事です。好き、きれいとは別に適切なことを言っているのではなくて、「ぼ

くはこの絵すきになれないな。」というのを話しながら、でもそれに対してですね。ここからいろんな筋道がえがけるのですが、ぼくは好きなのに何でそう思うの。確かにこれいいよね。なんでいいと思うのか。みんなで一回考えてみよう。この四つをうまく使って頂ければ、対話がどんなふうに進んでいくのか。今、これやっている。これやっている。方針を持つことができます。子ども達は今これやっているのだ。子ども達は自動的にぱっぱと直感的にやっていくので、ほっといても他人の意見を聞いて協働し始めている、違う観点を持って主張しているということが見えてくると思います。

美術、絵本のようにこれといった正解がすぐにはみえない場合、正解があるかもしれませんが。協働して考えていこうという時、この四つが大事ですし、環境、美術、物語、道徳に使えると思います。

みなさん、授業の現場の中でのどうしたらいいかという質問をいくつか頂きました。私もこういのおもしろいとは思いますが、やっぱり慣れていないからできない。自由に話し合う授業をやってみたいと思うし、でもどうしたらいいのだろう。これは、どなたも、私も数年前はそう思っていました。

Q4 私も対話型の授業をしたいが、自由討論に慣れていないので、何を話せばよいかわからない。

A. 対話型の授業で大事なものは、

- 先生ができるだけ話さず、発言したような生徒を見つける
- 生徒の発言に教師が反応するのではなく、他の生徒に反応させる
- （教師が反応する場合は）生徒の発言に対して十分な好奇心をもって反応する
- 異なる意見に着目し、それがどう違うのかについていっしょに考える
- 同じか、違うか、この二つをコントロールするだけで議論は進む

話さない

ものすごくこれは簡単です。これは自分が答えをしっているのになかなかできていないと思うのは、先生はこういう授業をしたければ**できる限り話さない**。単純なことなのですけれど、これがなかなかできない。こういう悩みを持つことは私も良く分かります。

信頼関係

簡単に言えば、子ども達と私達の信頼関係しかないと思います。**信頼関係が築けた時に、子どもは語り出してくれる。やっぱり子ども達がこの局面はやっていってくれるだろうということを信頼すること**。そう意味で見るとこの子は発言したそうだとちょっと引っ込み思案で自分から手を上げなさそうだけど、まあなんかこの子言いたそうだなということが見えてくるとそういう目で見ると、本当に40人は大変だと思います。

発言したそうだけど言ってみる。言いなさいではなくて、**子どもが、自分が言うか**

自由討論の基本

どうかを決めさせる、これもけっこうポイントなのです。「おまえ言いなさい。」ではなく、「君言うか。」「ううん。」「じゃあ次の機会ね。」というのが自由対話、自由討論の基本だと思います。

コメントするのではなく驚き 他の子どもに広げ

私はやってしまうのですが、私はいろいろ言いたいタイプなので、子どもとかが言った時に「それはね。」と言いたくなるのです。「それはね。」と言うよりも先に、まず、「すごく驚きました。」と言うべきなのですね。すぐにコメントするのではなくて驚いたら、「へーそんなこと思うの。」と言ったらいいと思います。その驚きは自分に持ち帰るのではなくて、「みんなどう思った？驚いた？」と他の子どもに広げ、反応させる。これは基本中の基本だと思います。

驚かないのもOKです。「どう思うの。」と聞くだけでもいいと思います。驚いたふりをしていることが、子どもにみやぶられてしまっはいけない。十分な知的好奇心を持って驚かないといけない。

違い

目をつけるポイントはたったひとつなのです。子ども達がどう進んだらといろいろ迷われると思うのですけれども、いろいろな発言がでてくると思います。ポイントはたったひとつで、違いです。いろいろ言っているけれど、何がどう違うのか？

これは、本当は時間があれば、絵本を使った授業のビデオをみながら、こういうことが具体的にお話できらいいのですけれども、後の時間でできたらいいですね。

結局、一番下に書いてありますけれども、子ども達が同じことについて話し合っているのか、違うことを問題にしようとしているのか、常に違いというのは、二つの間での違いであるのでしかないから、それについてちゃんと、個々の意見ではなくて、「君はさっき言った人と同じこと言っている？」、「違うことを言いたい。」、「同じことを言いたい。」、「同じだったら、どこが同じ？」ということ聞いていく。これは議論の本当に基本の基本だと思います。議論というのは、自分がそれに同じことを言うのか、違うことを言うのか、違うことを言うのならば、自分は何を加えているのか、それを加えることによって片方の側がどう変化をもたらしているのか、これだけなのです。

Q5 ただ話し合っているだけでよいのか？

- A. まずは、言葉を交わし合う経験（会話）が重要です。
言葉を交わし合うことは、人間社会のもっとも基本的なルールであり、道徳の基本です。
会話の作法を磨きながら、徐々に、問答を自覚的にやっていきます。

12

これも関連することですけど、こちらの方が先の方がよかったかもしれないです。「ただ、話し合っているだけに見えるのだけれどもこれでいいのかな？」まあ、そう

言葉を交わし合
う

経験

授業という公式
な場所

いうように見えて当然だと思うのですね。簡単に言えば、ただ話し合っているだけなのです。本当にただ話し合っているだけで、ルールもゴールもなさそうなのです。けれども、やっぱりこういうことが小学校でなぜやる必要があるのかという私の考えですけれど、言葉を交わし合うということは、**道徳的な意味で、人間社会のもっとも基本的なルール**だと思うのです。実は、挨拶もそうなのですが、挨拶もルールなのです。ね。「おはようございます。」とか相手の意見を聞かずにいきなり話しだすとかね。それは、好ましくない。それは、なぜかと言うと、一緒に生きていく上での何か大切なものを踏みにじっているからです。私が話している時に、突然話しだしたり、無視したりをしたりしませんよね。誰かが話している時に、「聞こうや。」というのは人間社会の基本中の基本であって、**自分は話させてもらったとか、相手の言うことを自分は聴くことができたという経験をなるべく幼いうちから持つことが重要**である。

単に話し合っているようなのですが、遊びで親しい友だちとべらべらとしやべっているだけではなくて、**授業という公式な場所で言葉を交わし合うことは非常に社会の基本的なマナーを身につけている場所**だと思います。その作法というものを徐々にみがいていくということが、こういう授業の基本だと思います。いきなりは、そんな理想的な議論はできるはずがない。できるはずがないから、まずは話し合ってみる。話し合っているばかりで、深まりがないとか、前に進まないと思われる方もいらっしゃると思います。

例えば、

- ステップ1 絵本について自由に発言する
- ステップ2 人の発言に質問する、質問に答える
- ステップ3 どの発言が妥当か、吟味し、選択する
- ステップ4 どうして多くの人がそれを妥当だと思うのか、さらに考えてみる
- ステップ5 じぶんたちが考えたことが、じぶんたち自身の言動に当てはまるか、テストする

参考に例えば、これは絵本を使った授業ですけれども、後でみなさんにしてもらいますが、まずは、自由に発言すると、まずは自分が言いたいことを言う、言いたいことを言って、相手が言いたいことを聞く。自分が言えたか、聞けたかが問題になるのですけれど。次にその段階になれてくれば、人の発言に質問をする。

これは、ステップ2までは、子ども達は自動的にやっけてしまいます。2年前に金澤先生がずいぶん前にやられた「ともだちや」の授業の対話分析を皆さんにお見せしました。ステップ3まで子ども達は授業開始の10分以内にそこまですきます。だれかの発言に対してそれはどういうことか質問の形になっていないのですけれども質問の形になりうるようなそういう応答をする。「だれそれさんの意見に賛成だ、なぜなら・・・」ということは言っていきます。ステップ3でとまったら、だめなのです。「だれだれさんの意見は自分もそう思う。」ではだめなのです。ここでとまってしま

妥当

ったら、言い合いになります。

例えば「ともだちや」ですが、「ともだちからお金をもらうのはよくない。」と多くの子どもが言うのです。「それが妥当、なんでそう思うのか。」「正しいと思うのか。」「なぜもらったらいけないのか。」「理由が言えるのか。」ということが問題になりますね。更に、「いかなる場面でもお金をもらったらいけないのか。」「自分達は友達からお金を受け取ってはいけないというけれど、自分達が出した答えが自分にあてはめた場合ちゃんと妥当するのですか？」といことを確かめていく。ここまでいけば、ステップ5までいけば、完璧な話し合いになると思うのですね。

確かめていく

数回の授業で慣れていけば、子ども達はできるようになると思うのですけれど、このようなステップを考えられてもいいのではないかと。授業であるから、なんらかのガイドラインを持つべきである。

Q6 教室のなかで何が起きているのか？

授業の見方を知りたい。

A. こどもたちは自然に議論を始めます。

じぶんが分からないこと、知りたいこと、発見したこと、納得できないことなどは、誰でも言いたくなります。

こどもたちがもっている「反応する力」を先生自身が見つけていくことが何よりも大切です。

言いたくなる

「授業でただ話し合っているだけで何がおこっているのか。わからないな。」「あれだけいろんな意見がでてくると、何をどうみたらいいのか。」子ども達は自然に、成績のよしあしや他の教科のよしあしと、比較的独立に自然に授業をしています。なぜかというところは知りたい、発見したい、納得できないということはおそらく人間であるならば言いたくなる。

- こどもたちの頭の回転はとても早いので、先生の準備が不足しているとこどもたちの議論についていけません。
- 素材（絵本、絵画など）の内容について、先生どうして意見を言い合うなど、先生方による事前の探求が不可欠です。
- ただし、先生が考えたことを生徒に言わせる必要はまったくありません。予想していなかった新しい方向にこどもたちの発言が向かうことは、授業にとってプラスになると考えましょう。

子どもの反応する力 見つける

考える学習の重要なポイントは、自分は考えがなくてもいいのです。ただその場において、どうもこれは違うな、これは納得できないなという反応できる。反応しようとする時に、もっとこんなふうに言った方がいい、自分はまだ言い足りない、自分が言ったことが相手にまだ届かないということを通してもっと考えるということになる。子ども達は反応する力を持っています。子ども達の反応する力を先生達が見つけていく。教えるのではなくて、見つけるだけでいい。人数も多くて、非常に子ども達の頭の回転が速いので、ものすごいスピードで進んでいくので、難しいですけど。

私もよく準備をしていないとついていけないことがある。何にこだわってこんなに話ししているのかわからなくなる。そのための準備として、「ともだちや」をいろいろな人と話し合ってみます。それは授業の準備というよりも、肩慣らしとランニングみたいなもので、とにかく体を動かしてみます。とにかく意見を言い合ってみることをしていると、「いろいろなことを考える人がいるのだな。」と気がつきます。これは、事前の探究として有効であると思います。

こういうタイプの授業は準備した通りに進まなくていいのです。準備したように進まないとすれば、なぜそうなのかということがふりかえればいい。先生が予想したこと、準備されたこと以上のことがおこったら、それはむしろいいことなのです。自分がこれぐらい進むだろうと思ったことと、違うことを子ども達が話した時は、そういう問題に自分は気づいていなかったのだと理解します。

考えることのうながし

チーム里浜づくりの人たちもそういう反応されていました。子ども達の話聞いて、自分は目をむけていなかったことを自分は発見したのだ。発見したということそのまま子ども達に伝えればいい。「自分はこういうことを考えられるかと思って準備した。君達はこういうことを話したから、自分はこんなことを発見した。自分はこのことを新しく知った。」と言えば、それがものすごく考えることのうながしになる。先生はそんなふうに考えるのだと子どもは受け止めるのだと思います。

こういう対話型の授業は、単純なのですけれど、やってみれば奥深い。授業実践だといえる。

アーノルド・ローベルの「動物物語」という本を使って、対話型の授業を体験してもらいたい。グループワークをしてもらいたい。

相互質問法をワークしたいと思います。

それではじっさいにやってみましょう！

グループワーク 1

アーノルド・ローベルの絵本から

グループワーク 2

オスカル・ブルニフィエの相互質問法

質疑応答

質疑応答から

- 教師としてどういう所を評価するのか？ こういう授業の評価の視点をみたらいいのか？
- 本間 みなさんに答えを探して頂きたいのです。どう評価したら、この学びはよくなるとお考えですか？
- 表現とか、関心とか、普通の項目的に自分でとらえたらいいのか。
- 本間 それは、ひとつのポイントになる。ちゃんと自分のいいたいことを他人に伝える仕方で質問ができていますか。それは、一つの評価ポイントとなるのではないか。
- だから、普通我々が評価する視点を持って評価するのでいいのですね。
- 本間 まあそれだけが全部かどうかはわかりませんが、自分が伝えたい相手につたあるように言えているかというのがポイントになると思います。
- 論理的というか。自分の言いたいことを言いたいことを質問できている。表現力とかを評価したらいいのですか？
- 本間 それだけではない。というのは、前回の話でうまく言えないことが必ずしも悪いことではない。なんども質問を撤回された、〇〇さんは、この評価規準からすれば、だめな人になります。私が教師ならそう評価はしない。うまく言えたことを評価規準に入れてもいいのですが、うまく言えなかったということを、何を評価するのか。〇〇さんのような反応をこう評価しますか？
- 何回も話すという意欲があるとしかとれない。チャレンジしようという意欲はあるが、能力としてはない。
- 高橋 よく考えていると評価します。言いたいことがうまく言えないことは、それほどよく考えているということなので、よく考えている最中だと評価をします。
- 考えているのは意欲なので、その考えがいいか、わるいかがわからないので、もしかしたら、とんでもないくだらないことを考えているかもしれないので、考えているとはいえないのではないのでしょうか？
- 本間 それに関して私の答えは、個別評価でなくてこのワークのみそは相互作用、どう反応しあっているのか？〇〇さんだけの発言をみると、〇〇さんの評価

よく考えている

貢献
相互作用

になってしまうので、〇〇さんと〇〇さんのやりとりや、それを聞いていたみなさんのやりとりを教師がどう観察するかの方が私は重要だと思います。〇〇さんの言おうとしことを他の人がどんなふうにして理解してそれを続けて考えようとしたかどうか、つまり、どのようにその人の発言が全体に貢献しえたという所がポイントになります。だから、相互作用を見て行く。つまり、ある人の発言をきっかけに議論をされるようになった。そのターニングポイントとなるような発言があったかどうか。〇〇さんの能力ではなくて、全体の能力といえますよね。その玉をうまく拾えることができる人がそのクラスにいたか、だから、うまく言えていない質問があった時に、似たようなことを別の角度から時間がたってだれかが言ったとしたら、それはすごく遠いパスが通ったことになるので、それを見逃さないことがすごく大事になります。パスを拾ったと私にそういうふうに見える。

— 相互質問法は教育課程上どう位置づけたらいいのですか

本間 道徳の時間にとてもうまくフィットすると思います。オスカル・ブルニフィエの本にのっている、「自由って何?」「平等って何?」というのはこのまま道徳に使えると思います。

この相互質問法は、道徳に限ってではなくて、科学の問題にも使えます。国語に使えます。『地球はどうしてまるいの?』という問題について5つの仮説をつくりましょう。理科の1時間に設けてみる。「地球はどうしてまるいの?」は少し子どもには難しいかもしれませんが。しかし、子どもなりにおもしろい仮説をだしてくるのではないかな。

相互質問法は論証するということに使えるので、どの教科にも使える。

研修資料

オスカル・ブルニフィエの相互質問法

オスカル・ブルニフィエの相互質問法

オスカル・ブルニフィエは、フランスを基点に世界で活躍する哲学者、哲学対話の進行役である。この相互質問法は、進行役の特別な技能や介入によらず、参加者たちが自分たちで議論を組み立てていく、議論のやり方を学ぶ方法として考案された。

議論の場所では、複数の人から次々といろいろな意見が出てくるので、一つの意見についてじっくり考えることができないこともある。この方法ではそうしたことを避けるため、問いに対する答え（仮説）を一人の参加者が立て、全員でその答えに質問をしながら、その答えが意味すること、限界などを考えていくという方式をとっている。

仮説の提案者には、いろいろな質問を聞きながらも、最初に口に出した仮説の立場に徹底して立ち、そこから物事を考えて行くことが要求される。また、質問をする側には、自分の言いたいことはいったん脇におき、提案者の考えていることをよく理解しようと努めること、他人の考え方に沿って考えを展開しながらも、その考えの限界を探ることが求められる。

※相互質問法を行うのに有用な素材

『こども哲学 よいことと、わるいことって、なに?』より

（オスカル・ブルニフィエ著、西宮かおり訳、朝日出版社、2006）

問い：いつでもしたいこととしていいのかな？

答え：うん、したいことをしているほうが楽しいもん。

だめだよ、みんなのじゃまになるときは。

しない。だって、あれしようこれしようって決められるほど、おとなじゃないもん。

うん。よく考えてだったらいいとおもう。

だめっていわれていることはしちゃいけないのだ。

〔進め方〕

(1) 問い（議論の主題）をたてる

ex. いつでもしたいこととしていいのかな？

(2) 問いに対する一つ目の答え（仮説）を定式化する

問いに対する答え（仮説）を、参加者の一人が定式化する。

ex. うん、したいことするのはたのしいもん。

(3) この答え（仮説）の意味は明確であるか、また、それは最初の問いに答えたことになっているかを他の参加者に確認する。このやり取りのなかで、仮説の提案者はそれを作り直し、洗練させることができる。この確認作業が済んだ後、黒板などに仮説を確定させ、記述する。

(4) 一つ目の答え（仮説）の吟味、仮説提案者への質問

答えが定式化されたら、他の参加者はこの答えについて提案者に質問をする。

ex. したいことだけしてたらいいのかな？

自分のしたいことっていつも自分でわかっている？

それが他の人の迷惑になる場合はどうするの？

この時、他の参加者は、質問するように見せかけて、自分の言いたいことを述べてはいけない。

ex. 私はこう思うんですけど、それについてはあなたはどう思います？

質問は、仮説の曖昧な点を問う、仮説のなかにある観点を発展させる、反対する原則や事実を挙げる、など、その仮説の「内的批判」（その考えを徹底的に掘り下げ、展開すること）を行う目的でなされる。

(5) 質問に答える

仮説に対する質問に答えるのは、仮説の提案者である。提案者には、質問が明確であるか、自分の答え（仮説）に対してそれが的をえているかどうかを決める権利があり、質問の作り直しを相手にたのむことや質問を却下することもできる。

提案者が質問を受け入れる場合には、それに答える。この答えが明確であるか、質問に対する答えとなっているかどうかは、質問者が判断する。

ここから以降は、最初の質問者がさらに質問をし続ける、他の参加者から質問をつるなど、いくつかのパターンが考えられる。一つの仮説についての吟味をどこで終えるかを決めるのは、（参加者にも意見を聞くが、そのタイミングも含めて）進行役の裁量である。

(6) 別の仮説を立てる

進行役は参加者の関心や状況を見て、一つ目の仮説の吟味を終了し、二つ目の仮説を他の参加者に提案させるよう促す。

ex. だめだよ、他の人の迷惑になるときは

この時、可能であれば、二人目の仮説(答え)の提案者に、最初の仮説と自分のものとどこが違うか、その争点はなにかということを書いてもらう。ex. 自分と他人とどちらを優先的に考えるか

(7) 【振り返り】仮説は最初の問いに十分に答えているか、仮説が表している原則や概念とは何か、仮説どうしの関係について振り返って考えてみる。

仮説がうまく言い表された場合には、それはテーマを考える上で重要な原則や概念を含んでいるはずである。その仮説ではどんな原則や概念について検討されたか、それらは最初の問いについてどこまで有効であったか、あるいは一つのテーマに関して複数の仮説(や原則や概念)が登場する場合には、それらの間の関係についても考えてみることができる。